

人と野生鳥獣のかかわり方の歴史と教訓

戦後日本の狩猟ブームを読みとく

新領域創成研究科

国際協力学専攻

47-46887 角口裕子

指導教員 佐藤仁助教授

キーワード：狩猟史、自然（鳥獣）保護、スポーツハンティング、銃器、公衆安全、技術

1. 研究の背景

環境問題への関心の高まりや、「どのような自然を、何のために、どのように扱うか」という思想論争を背景に、「人と野生生物の共存」に向けた国際協調は 1970 年代以降にすすんできた。1970 年代のアフリカでは「手つかずの自然」を確保するために人間を排除するような「原生自然保護」政策がすすめられた。1980 年代に入ると「開発か保護か」の二元論は批判されるようになり、開発援助の下ですすめられる住民参加型保全の政策が提唱される。住民参加型の WL Management 政策にスポーツハンティングを導入し、欧米諸国のハンターに限って狩猟権を与え、それを観光資源とする国も存在する。

しかし、いずれの政策も野生鳥獣の捕獲という直接の行為に及ぶ「狩猟者」を、自然に対する「脅威」と捉え、政府や管理側の監視下に置きやすくするための措置という側面があった。アフリカの事例の場合は、野生鳥獣の科学的な管理方法が優先され、地元住民にとって貴重な狩猟資源の捕獲手段を奪ってしまうという構図に問題があった。

自然保護や WL Management 政策という枠組みの中で、「狩猟者」や「狩猟文化」をどのように捉えなおすか。また、人と野生鳥獣のかかわり方の一つとして、「狩猟文化」をどう捉えなおすか。国際社会において、未だにその視点の混乱は見受けられると考える。

人間と自然のかかわりを、どちらを優先するかではなく、全体性で捉えることや、その土地の歴史や文化の問題に目を向ける重要性がいま、指摘

され始めている。

2. 目的

人と野生鳥獣のかかわり方の一つとして、「狩猟文化」をどう捉えなおすか。本研究は、新たな枠組みで捉えるために、日本を事例とし、「自然保護」概念の出現によって変化した狩猟者の社会的位置づけを明らかにする。例えば昨今における獣害問題は、日本における野生鳥獣問題の一つである。今まで「野生鳥獣の減少」の原因として非難されてきた狩猟者はいま、獣害対策の担い手としてその社会的位置づけを確保しつつある。

特に戦後の日本社会において狩猟者は、一般的に「保護」の対極として捉えられてきた。変動する狩猟者の社会的位置づけの歴史から、今の日本で無前提に受け入れられている鳥獣保護思想の土台を問い直す。そして、これまでは何が問題で、これからの「人と野生鳥獣のかかわり方」には何が必要なのか。歴史から学べる教訓を提示する。

3. 分析の視点

今、日本において狩猟者は減少の一途を辿っている。しかし、日本で狩猟は普及し得ないと性急に捉えるのは問題である。戦後から昭和 50 年代前半まで、日本は狩猟ブームを経験している。

本研究は、狩猟ブームの終焉のきっかけには、狩猟と銃器の関係が大きく影響していると考えられる。狩猟文化は銃器の発達に大きく影響を受けてきた。狩猟の変遷を、技術の発達という視点から捉え、江戸時代から現代まで、当時の自然環境や

国家、経済、法制度、社会的文化を描く。当時の様子を知るために用いた資料は、主に野生鳥獣の生息環境を描いた絵巻物、文献史料、新聞記事、雑誌、国会議事録である。そして、狩猟の中でも特に、明治以後に普及した趣味的な狩猟、スポーツハンティングを取り上げ、社会的背景やその後の影響を分析する。

4. 考察と結論

狩猟者の社会的位置づけの変化には、主に以下の要因が大きく影響を及ぼしていた。

- a. 「鉄砲」を所持する狩猟者に対する国家（政府や軍を含む）の介入
- b. 「鉄砲」の民間普及と技術的革新
- c. 公共の安全を脅かすとして「鉄砲」を危険視する世論
- d. 鳥獣保護の出現

銃砲所持規制の厳しい江戸時代では、狩猟者は「獣害対策の担い手」という名目で存在し、常に時の権力者から監視下に置かれる立場にあった。明治に入って一気に庶民のスポーツとして普及した狩猟は、やがて第一次大戦が始まると軍部主導の統制管理狩猟下に置かれ、その市場論理に飲まれていく。銃器の性能の向上は、鳥獣の捕獲率を飛躍的に上げ、鳥獣減少に拍車をかけた。狩猟者は常に「鳥獣減少」の原因の責任を追及される立場にある。しかし社会は同時に、当時において「獲らせる」社会構造が存在したということに目を向ける必要はある。

また、戦後は青少年の「おもちゃ」に過ぎなかった空気銃が、その性能を向上させるに従い、社会問題としてさまざまな論争を巻き起こす。空気銃の規制強化を求める世論は、公衆の安全面を懸念する声と、「野生鳥獣の減少」を懸念する声を伴っていた。空気銃の危険性は、実は明らかではない。だが、「鳥獣保護」という新たな思想の普及は、その対立軸として「狩猟者」を据えていた。戦後「鳥獣保護」という新たな保護思想の普及は、「銃器の規制」や公衆の安全という全く異なった

側面から強化されてきたという社会背景を明らかにした（図1）。

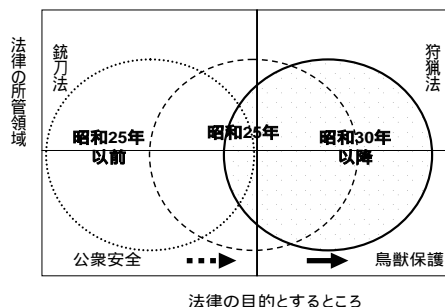


図1：空気銃問題争点の流れ（筆者作成）

わずか、数十年の間に、野生鳥獣はハンティングの対象から「保護」の対象へと移り変わっていった。「野生鳥獣の価値」が変化しているということは、人と野生鳥獣の付き合い方もまた、変化しているということである。「人と野生鳥獣のかかわり」の理想のあり方を導き出すのは、先ずはその土台を知ることが重要だと考える。

これからの社会が、「人と野生鳥獣のかかわり方」の一つとして、狩猟をどのように評価していくか。それはどのような狩猟文化を伝承していくか、にかかっている。明治以降の「狩猟ブーム」は、「欧米文化」に追従し、その適応に際して混乱する日本社会の様相を映し出し、欧米追従型の狩猟文化の脆さを露呈した。いま、伝統的狩猟者からスポーツハンターまで、さまざまな狩猟者がさまざまな趣旨で狩猟を行っている。このさまざまな形態を、どのように「人と野生鳥獣」の理想のかかわり方として、いかしていくか。その具体的な構想は、本研究の今後の課題でもある。

主要参考文献

- 鬼頭秀一[1996]、『自然保護を問いなおす 環境倫理とネットワーク』、筑摩書房。
- 篠原徹編[1998]、『民俗の技術』、朝倉書店。
- 田口洋美[2000]、『列島開拓と狩猟のあゆみ』、

『東北学 Vol.3』、東北芸術工科大学東北文化研究センター。